

研究題目

児童一人一人のよさを伸ばし、明るく元気に、
地域と共に歩む学校
～地域の力を生かして～

目 次

- 1 研究の概要
 - 2 研究の内容と方法
 - 3 具体的な指導とポイント
 - 4 研究・実践の成果
 - 5 今後の課題
- 註・参考文献

埼玉県行田市立南河原小学校 校長 向井 隆盛

1 研究の概要

(1) 研究の趣旨

本校は、行田市の義務教育学校再編計画に沿って、令和14年度に開校予定の義務教育学校に統合する⁽¹⁾。児童が、新しい学校で、自らが生活する地域に誇りを持ち、明るい未来への展望をもって学業に励むためには、現在も、これからも、地域ぐるみで教育活動に取り組まなければならない⁽²⁾。

そこで、本研究では、目指す学校像でもある「児童一人一人のよさを伸ばし、明るく元気に、地域と共に歩む学校」を研究主題とし、「地域の力を生かして」学校、地域を元気にする教育活動について実践研究を行う。

「地域の力」とは、地域の人、自然、歴史、産業などが融和し、よりよい地域づくりによって未来を志向した力であると考えられる。例えば、本校のある南河原の産業であるスリッパづくり⁽³⁾を取り上げた教育活動が考えられる。国際化の流れを積極的に取り入れ、海外のデザインを取り入れたスリッパは、高級スリッパとして多くの百貨店で販売されている。この地域から世界に打って出る気概に満ちた生産活動とそこに関わる人々の思いや願いは、魅力ある大人モデルであり、児童に、人生への明るい展望をもたせてくれる。また、地域の歴史に目を向け、北河原酒巻の古墳⁽⁴⁾から出土した、国際色豊かな埴輪群を取り上げた教育活動も考えられる。全国的にも貴重な埴輪について児童が知ることは、工夫と努力によって故郷を切り拓いてきた先人の生き様に触れることとなる。子供たちが、より豊かな生活を目指し、努力し、明るい未来を切り拓く意志と展望をもてるように育てたい。

本研究においては、先行研究⁽⁵⁾において示されて理論を実践し、学校経営における効果を検証する。その際、地域の力を「地域の人材」「地域の自然や文化財」「地域の産業」の3つの観点から捉え、それぞれ2つずつの計6実践を取り上げる。3つの観点は、どの地域においても比較的设置しやすいことを念頭に置いて設定した。実践の報告においては、学校教育に効果的に取り入れる方法やそのポイント、ねらいとする効果について示すこととする。



【行田市義務教育学校設置に向けた再編計画〈個別編〉】

(2) 研究の対象

本研究の対象は、本校のグランドデザインである「すずかけプラン」及び、本校の特色ある教育課程である「南河原小文化カリキュラム」⁽⁶⁾と「すずかけ環境学習」⁽⁷⁾である。本校では、「地域と共に歩む学校」の実現を目指し、地域の力を積極的に活用し、グランドデザインや教育課程の効果拡大に取り組んでいる。

【グランドデザイン「すずかけプラン」】

すずかけプランは、行田市の第2次教育大綱を受け、「郷土に誇りをもち 未来を切り拓く人材をはぐくむ」ことを掲げ、学校教育目標である「こころの豊かな子」「すすんで学ぶ子」「たくましい子」を育てる教育活動を行っている。これらの3つの目標を達成する基礎として「家庭・地域との協働」と「安心・安全な学校」を加え、5つの重点項を設定し、学校経営の根幹としている。また、児童は、学校のシンボルツリーであるスズカケノキに掛けて、「す」進んであいさつ、「ず」すみずみまでそうじ、「か」感謝のこころ、「け」元気な体、「の」伸ばそう考える力、「子」交通安全」を合言葉として、日々学業に励んでいる。

①「こころの豊かな子」の育成

「時を守り、場を清め、礼を正す」ことを大切に、基本的な生活習慣を確立することに力を入れてきた。中学校と合同での「あいさつ運動」やPTAと協働で行う「心を育てる日めくりカレンダー」の作成と活用、地域育成会と一体になって行う芸術鑑賞会などは、地域ぐるみの活動といえる。

また、本校独自の教育課程として、「南河原小学校文化カリキュラム」は、これまで長年取り組まれてきた本校の文化学習を、教科を縦軸とし、実施時期を横軸として表にまとめ、各教育活動間の系統性を見出すことでより高い教育効果を生み出す試みである。

【南河原小文化カリキュラム】

こころの豊かな子

特別の教科道徳と人権教育の推進

本校独自の取り組み

- 暗唱チャレンジ
- すずかけパール賞
- 読書タイム
- 「すずかけの子」

定期的な生徒指導委員会の開催

- 職員会議とセットで実施
- 情報共有にとどまらない作戦会議に

こころの豊かな子を育む教育

- 凡事徹底・率先垂範・善行奨励
- 一人一人のよさ・明るく元気に

【家庭との連携】

- 暗唱チャレンジ
- 日めくりカレンダー

【地域との連携】

- ふるさと学習
- 芸術鑑賞会
- 環境学習

【小中連携】

- あいさつ運動
- 音楽会
- 合同朝会

【重点① こころの豊かな子】

地域と共に歩む学校 博物館・美術館と協働する 南河原小文化カリキュラム

	1学期			2学期			3学期				
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	国語	国語	国語	国語	国語	国語	国語	国語	国語	国語	国語
生活	生活	生活	生活	生活	生活	生活	生活	生活	生活	生活	生活
社会	社会	社会	社会	社会	社会	社会	社会	社会	社会	社会	社会
理科	理科	理科	理科	理科	理科	理科	理科	理科	理科	理科	理科
図画工作	図画工作	図画工作	図画工作	図画工作	図画工作	図画工作	図画工作	図画工作	図画工作	図画工作	図画工作
総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間
特別の教科道徳	特別の教科道徳	特別の教科道徳	特別の教科道徳	特別の教科道徳	特別の教科道徳	特別の教科道徳	特別の教科道徳	特別の教科道徳	特別の教科道徳	特別の教科道徳	特別の教科道徳
その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他

【南河原小文化カリキュラム】

すずかけ環境学習

地域の農業生産

ふるさとの風景

地域の自然と農業生産を考える

衣・食との関係を考える

地域の歴史を学ぶ

生活知の復権

古代米

南河原・北河原の自然

四季折々の花

伝統野菜

セリーフライづくり

【すずかけ環境学習】

②「すすんで学ぶ子」の育成

「すすんで学ぶ子」の育成では、ICT機器の積極的な利用を進め、タブレット端末を活用した自主学習を促進するための手引き「すたーと」⁽⁸⁾を作成し活用している。また、校長室での「暗誦チャレンジ」⁽⁹⁾や「自主学習ノート」⁽¹⁰⁾の作成に全校で取り組んでいる。



【重点② すすんで学ぶ子】



【家庭学習の手引き「すたーと」】

また、今年度は、学力学習状況調査の結果等を踏まえ、国語を中心として、読解力の育成を進めている。年間を通して、埼玉大学の本橋幸康先生に指導いただき、授業における発問について、研究を進めているところである。現在は、研究の基調となる講義及び第1回の視察を終え、その成果を生かした研究授業の準備を進めている。

③「たくましい子」の育成

新体力テストの結果をもとに、生涯体育の観点から、自らの課題に向き合い続ける姿勢を育てている。ねらいをもって継続して運動することや、保健指導、食育などとの関連を大切にした実践を進めている。2学期には、市の栄養教諭を招いた授業も実施する。



【重点③ たくましい子】

④家庭・地域との協働

学校応援団活動として、毎日、地域の方に学校教育に参画していただいている。登下校の見守り、月2回実施の昔遊び、読み聞かせなどは、地域ボランティアが自主的に計画し、学校の担当者と調整して実施している。

社会教育機関である公民館や市立、県立の博物館・美術館等とも連携を密にし、一体となった教育活動を行

っている。出前授業の実施回数は、年間20回程度に及ぶ。専門家を授業で活用することで、働き方改革、教員研修、キャリア教育など様々な面での効果が期待できる。



【重点④ 家庭・地域との協働】

⑤安心安全な学校

学校事故0を目標に掲げ、施設の安全管理、安全教育、防災教育、職員の倫理観の育成を進めている。

地域ぐるみの児童の安全確保の取組や交通安全推進団体との協働による交通安全教室は、地域との協働を掲げる本校ならではの取組である。また、熱中症対策、食物アレルギー対策等にも力を入れ、地域の意見を反

映させた地域との一体感のある取組として実施している。地域中の児童横断個所の旗は学校応援団によって設置されたものである。



【重点⑤ 安心安全な学校】

2 研究の内容と方法

本研究では、すずかけプランに基づく教育活動について、6つの具体的な事例を取り上げ、「地域の人材」「地域の自然や文化財」「地域の産業」の3つに分類して提示し、地域の力の活用という観点から、その効果を考察する。

実践1では、「地域の人材を活用した教育環境の整備」として、①学校環境緑化の取組、②児童の安全確保の取組について述べる。これらの取組は、本校の教育活動全般に渡り、年間を通して行っているものである。

実践2では、「地域の自然や文化財を生かした総合的な学習の時間の展開」として、①地域の自然を生かした「ふるさと学習」の取組、②地域の文化財を生かした「ふるさと学習」の取組について述べる。これらの取組は、博物館・美術館とも連携し、パッケージ型の体験学習と教科教育を組み合わせ、地域の力(自然や文化財の価値)を教育的価値に転換する試みである。

実践3では、「地域の産業を生かしたキャリア教育の推進」として、①地域の産業を生かした「ふるさと学習」の取組、②地域の産業に携わる人材を取り上げた「大人モデル事業」の取組について述べる。これらの取組は、地域の産業について学ぶ活動を通して、地域の産業そのものと、それを支える人々の姿を児童に示すことで、児童に将来への展望をもたせるキャリア教育の視点を含んでいる。

本研究における成果の検証は、児童・保護者による学校評価アンケートの結果を分析し、考察することで行う。本校では、学校評価の有効回答率を上昇させるため、紙面によるアンケートを実施している。調査内容は、学校経営の評価となるよう設問を設定し、それぞれの重点についての効果を検証できるようにした。

3 具体的な指導とポイント

(1) 実践1「地域の人材を活用した教育環境の整備」

①学校環境緑化の取組

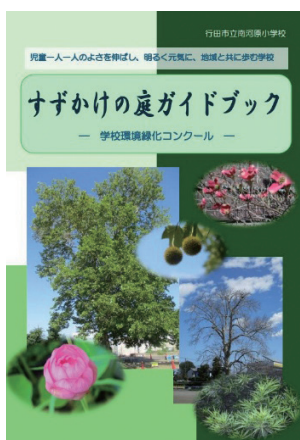
南河原小学校の学区周辺には、農業従事者、造園業者の方が多い。そこで、これらの人的つながりを最大限に活用し、学校環境緑化に取り組んでいる。

例えば、今年度は新たに「古代米の栽培」に挑戦している。種もみから苗を育てる方法、田植えから稲刈りまでの世話の仕方は、近隣の農家の方に御指導いただいた。できた米は、地域の古代米の料理に造詣の深い方の協力を得て、児童がおにぎりを作り、食べる予定である。



【古代米の栽培】

また、校庭の樹木と触れ合う活動を通して、地域の自然環境や、県の林業の取組への興味関心を高める環境整備を進めている。造園業に携わる方々の協力を得て、校庭の樹木のガイドブック⁽¹¹⁾を作製した。また、そこで得た知識を活用して、児童が樹木に親しめるよう謎解きゲーム「すずかけの秘宝」⁽¹²⁾を作成した。地域の方は、学校の樹木の謂れを知っていたり、学校の歴史とそこにある樹木の間接的な関係を知っていたりすることが多い。そうした知識を児童に伝えることは、児童の地域への愛着を一層高めることにつながるものである。



【ガイドブック】



【謎解きゲーム】

《教育効果を高めるポイント》

農業や林業に関わる知識や技術は、多くの場合学校職員が持ち合わせていないものである。ないものは、地域から借りることで補い、児童が地域に愛着をもったり、豊かな学校教育が展開されている様子を伝えたりすることで、地域に還元していくことが大切だと考える。このように好循環をつくりあげるために、管理職が率先して地域人材の優れた特性を見出していくことがポイントである。

②児童の安全確保の取組

児童の登下校の安全確保において、地域自治会を中心とした、見守りボランティアの協力を得ている。登校時には、多くのボランティアの方が、学校までの道のりを、児童と共に歩いてくださっている。遠くの地域の方は、途中で合流してくる児童のことも気にかけてくださり、学校まで来ると、そのまま整列してあいさつ運動を行い、児童について気になることがあれば、校長、教頭に相談したり、情報を提供したりしてくれることもある。

現在、全体で60名程度のボランティアの方が活動しており、春の全校徒歩遠足にも児童と一緒に参加し、道中の安全を確保してくれる。ボランティアの構成メンバーは、自治会長など自治会役員を中心に、保護者、児童の祖父母、地域の団体役員の方など多様である。この多様さに、地域全体で子供たちを育てようとする高い意識が表れている。



【児童の登校を見守るボランティアの方々】



【注意を促す横断旗】

また、学校応援団の協力を得て、児童が登下校時横断する箇所に「横断中」の黄色い旗を設置している。半年に一回程度旗の付け替え作業を行い、自動車のドライバーに対して児童の存在をアピールする目印となっている。その他、通学路の見通しをよくするための除草作業や、危険個所の通報など、通学路の環境整備についても積極的に行ってくれる。昨年度に引き続き、今年度も児童の交通事故0を達成することができている。

《教育効果を高めるポイント》

管理職は、毎朝、見守りボランティアの方と情報交換をすることが大切である。児童の変化を見出したり、地域の情報をいち早くキャッチしたりすることは、学校経営において何よりも重要なポイントである。

(2) 実践2 「地域の自然や文化財を生かした総合的な学習の時間の展開」

①地域の自然を生かした「ふるさと学習」⁽¹³⁾の取組

南河原小学校区は、利根川の氾濫原に広がった低湿地に位置し、水田耕作に適した自然豊かな土地である。この地域の自然を生かし、地元の環境教育アドバイザー⁽¹⁴⁾や、県立博物館の学芸員による環境学習を行っている。環境教育アドバイザーによる環境フォーラムでは、5年生の児童が地域を流れる星川近辺に棲息する魚などの水生生物や、野鳥、獣について学習した。また、4年生は、川の博物館の学芸員とともに、学校周辺をフィールドワークし、地域に棲む4種類のカエルと水田稲作の関係について学んだ。



【学校周辺でのフィールドワーク】



【星川の水生生物の学習】

また、4年生の児童は、学級全体で、土や砂など身近な素材を使って星川の水を浄化する研究に取り組んだ。環境科学国際センターの研究員を招き、水の浄化実験と、土壌の学習会を行った。水の浄化のポイントがわかり、研究のブラッシュアップに役立った。



【4年生のろ過の研究】



【土壌についての授業】



【水をろ過する実験】

《教育効果を高めるポイント》

地域の自然について学ぶことを通して、児童は、地域の原風景に愛着をもつとともに、自らが住む環境を大切にすることの意義を理解する。専門家の協力を得て進めることで、一層内容の深い学習活動を効率よく実施することがポイントである。

②地域の文化財を生かした「ふるさと学習」の取組

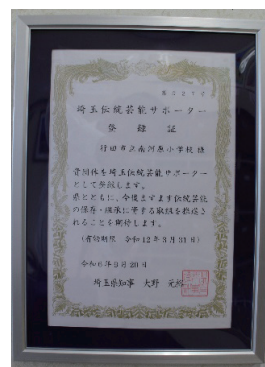
南河原小学校の学区には、多くの文化財がある。例えば、市内で継承されている民俗文化財「ささら獅子舞」⁽¹⁵⁾のうち、「在家の獅子舞」と「馬見塚の獅子舞」があり、地域の保存会を中心に伝承している。1年生の児童が学級活動で「夏祭り」を行ったときには、児童の発案で、段ボールの獅子頭をつくり、獅子舞を舞っていた。児童にとって身近な存在であり、地域のお祭りにも、児童が獅子舞の担い手⁽¹⁶⁾として参加している。



【夏祭りで獅子舞を舞う1年生の児童】



【地域の担い手として参加する児童】



【認定証】

南河原小学校は、埼玉県の「伝統芸能サポーター」⁽¹⁷⁾として登録し、認定を受け、伝統芸能としての「ささら獅子舞」の継承に取り組んでいる。毎年2月に、地域の保存会の方々の協力を得て、ささら獅子舞の体験教室を実施している。獅子舞の演舞を見せてもらい、太鼓や笛の音を鳴らしたり、獅子頭を着装したりする体験を行っている。



【ささら獅子舞の進列】



【太鼓を鳴らす児童】



【獅子頭を着ける児童】

《教育効果を高めるポイント》

地域の文化財としては、他に酒巻の古墳群や観福寺の石塔婆⁽¹⁸⁾などがあり、地域の方々の協力を得て、教材として活用している。カリキュラム上に示すことで、計画的に地域の文化財を取り上げ、その都度、教員も学びを深めていくことがポイントである。

(3) 実践3 「地域の産業を生かしたキャリア教育の推進」

①地域の産業を生かした「ふるさと学習」の取組

南河原小学校区近辺では、古くから在来青大豆⁽¹⁹⁾や綿花の栽培⁽²⁰⁾が行われてきた。そこで、5年生の総合的な学習の時間では、これらの農作物の栽培に挑戦し、加工して製品にする工程に関わったり、見学したりする学習を行っている。地域の資源を生かした生産活動に触れることで、児童に職業観をもたせることがねらいである。



【在来青大豆の収穫】



【在来青大豆で作ったお豆腐】



【おからでゼリーフライづくり】

収穫した大豆が、豆腐に加工され、残った「おから」も、郷土料理のゼリーフライ⁽²¹⁾として利用していく過程を経験し、生産、加工、販売などの様々な業種の職業の方と接することができる。児童は、「人々は、つながりの中で、自らの職業に誇りをもち、生業を営んでいる」という職業観をもつことができる。

6年生では、綿の栽培で古くから布の産地として栄えてきたこと、足袋の生産で有名になったこと、足袋からスリッパへと転換したことを学び、これからの地域の産業について考える学習を行った。1・3・5年生で積み重ねてきた学習を貫き、6年生でこれからの地域の発展について考えることは、児童が地域に誇りをもち、これからの人生をしっかりと歩むための大切な学習である。

《教育効果を高めるポイント》

こうした一連の物語性⁽²²⁾のある学習は、「学びのデザイン」として、学年間の活動が一連の活動としてイメージできるように示すことが大切なポイントである。職員間の共通理解を図ったり、引継ぎをしたりするための資料としてのみならず、地域の方との打ち合わせ資料としても役立つ⁽²³⁾。



【学びのデザイン】

②地域の産業に携わる人材を取り上げた「大人モデル事業」の取組

地域には、アイデアを生かして農業生産や工業生産に取り組むたくさんの方々がいる。地域の大人が努力して産業に取り組む姿を見せることは、児童に将来への夢や希望を抱かせることにつながる。そこで、本校では、社会科見学の一環として、地域の段ボール工場やスリッパ工場の見学を行っている。特に、スリッパ工場では、アフリカやブラジルから布を仕入れ、新しい商品を開発し、全国のデパートで高級スリッパとして販売していく取組に触れさせている。



【段ボール工場の見学】



【南河原スリッパ】



【スリッパ工場の見学】

また、地域の農業生産の中から、シイタケ栽培と果樹の苗の栽培を取り上げ、5年生の総合的な学習の時間に見学を行った。手間暇をかけ、手作業で育てたシイタケは、都内有名料理店で使われている。温室で様々な工夫を凝らして育てられたマンゴーの苗は、海外の都市へと出荷されていく。いずれも、工夫と努力で地域に新しい産業を興す試みであり児童は目を輝かせて話を聞いていた。このように、目指す大人モデルをたくさん見せていくことは、児童に将来の展望をもたせる重要な学習であると考えられる。



【シイタケ栽培に取り組む方への取材】

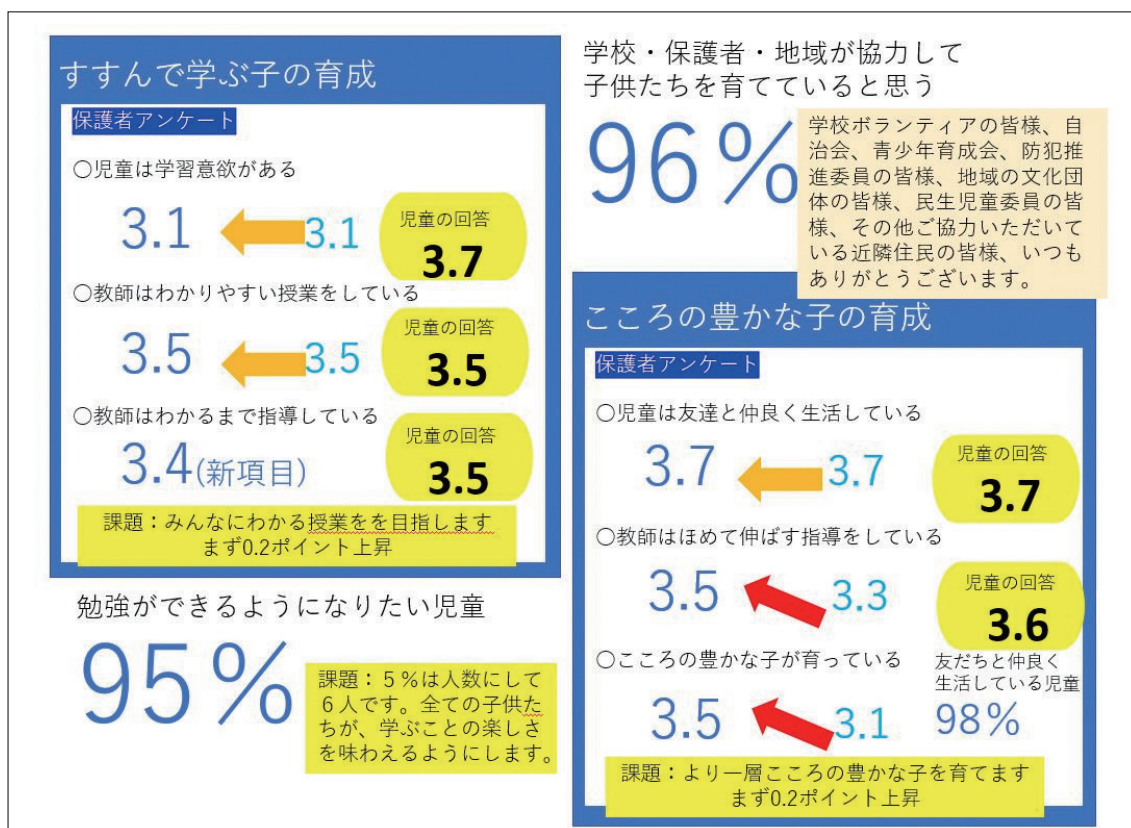


【果樹の苗を育てている方への取材】

《教育効果を高めるポイント》

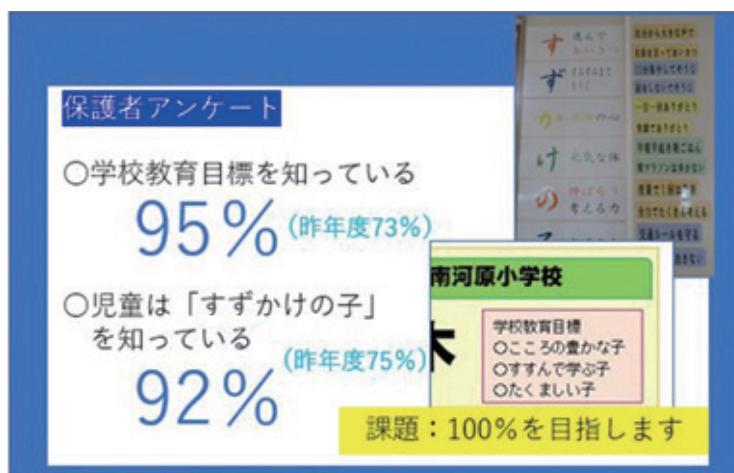
話をしてくださる地域の方に、事前に管理職より授業の趣旨を伝え、工夫して産業を興していくことの大切さを述べてもらうことがポイントである。見学当日は、児童に地域の方の魅力が伝わるよう、教師が、端的に示していくことが必要である。

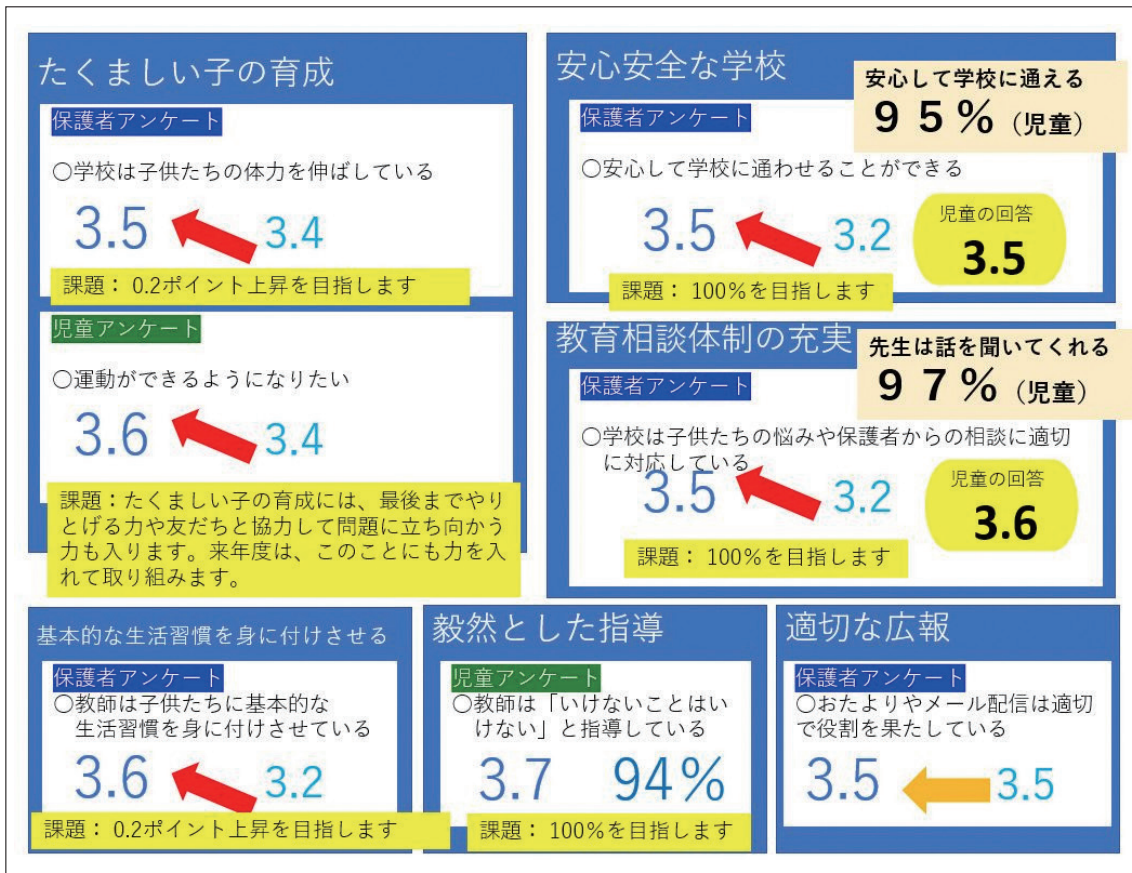
4 研究・実践の成果（調査は令和7年1月現在）⁽²⁴⁾



取組の成果として、地域全体の教育への関心が高まり、一体となって子供たちを育てていこうとする意識の醸成につながったといえる。令和6年度末の学校評価においては、学校・保護者・地域が協力して子供たちを育てていると答えた保護者は全体の96%であった。新設の質問項目であるため、過年度の数値と比較することはできないが、高い値であるといえる。令和7年度は、2年目となるので、より一層高めることを目標としている。

学校教育目標や、児童の合言葉である「すずかけの子」についての保護者の周知率も92%と高い数値となっている。こうした目標の共有も、地域ぐるみで児童を育てる原動力であると重く受け止め、100%を目指して広報活動を進めていく。





地域ぐるみの学校安全の取組においても、保護者からは、95%の高い評価を得ることができている。教育相談への対応の満足度も3.2から3.5へ0.3ポイントの増となり、地域ぐるみで児童を育てる取組が浸透してきていると考える⁽²⁵⁾。

結果として、学校が楽しいと感じている児童は、全体の98%であり、100%に近づけることができた。残りの2%の児童については、校長が聞き取りを行い、楽しくないと答えた理由について明らかにし、解消に向けた策を講じた。



5 今後の課題

本校は、義務教育学校として新たな出発をするまで、残り7～8年程度である。地域ぐるみの教育体制をその間、維持、発展させ、地域への愛着を持ち、しっかりとした地盤に立って、生涯学び続けることのできる児童を育てなければならない。私も含め、あと2～3代の校長がその責を担うことになる。持続可能な形で次に引き継ぐことができるよう、理念の継承と方策の整備を進める。

註

- 1) 行田市は、児童生徒数の減少に伴い、学校が小規模化することで教育活動を実施する上で支障が生じている。一定の学校規模を確保し、より良い教育環境と質の高い教育を実現するため、令和16年度までに3校の義務教育学校に再編することを目指している。南河原小学校は、Aブロックに属し、令和14年度の開校を目指している。

<https://www.city.gyoda.lg.jp/material/files/group/38/gyodashigimukyyouikugakkousetthinimuketa-saihenkeikakukobetuhen.pdf>

- 2) ボーマンは、アイデンティティの性質についてつぎのように示している。

人は自分がどこに所属しているのか自信がなくなったときに、アイデンティティについて考える。つまりそれは、さまざまな行動様式や行動パターンのどこに自分を置くべきなのか、周囲の人々がこの身の置き方を正しく、適切なものとして受け入れてくれることをどう確かめたいのか、そしてそうした結果、双方がお互いのいる場所をどうやっていくかを納得できるようにすることに、自信がもてなくなったときである。

義務教育学校が開校し、南河原という地域から、もっと広い社会へ出ていくとき、児童にとって生活全般の在り方について不安が生じることが予想される。そのとき、自らの生活する地域への愛着、他の地域の人々への理解、寛容と融和、対話と調整が最も重要な能力となると考えられる。偏狭なナショナリズムに傾倒することなく、文化の普遍性に立った教育活動が必要である。

- 3) 行田市南河原のスリッパ生産は、昭和29年頃から始まった。昭和36年に組合が設立され、地域世帯数の90%がその生産に関わる地域の基幹産業となった。昭和55年には、生産量全国1位のスリッパ産地となったが、その後、外国産の安価なスリッパに押され生産量は減少した。現在は上質なスリッパの生産に転換し、近年は藍染の美しい「JAPAN BLUE SLIPPER」や「アフリカパーニュ」「ブラジルカンガ」といった世界の美しい図柄を取り入れたスリッパ生産を行っている。新作スリッパ等の情報はオンラインの「南河原スリッパ博物館」で見ることができる。

南河原スリッパ博物館：<https://minami-syokoukai.jp/857/>

- 4) 酒巻古墳群は、6世紀初頭から7世紀前半にかけて、行田市北西部の利根川右岸に築かれた古墳群である。前方後円墳3基、帆立貝型前方後円墳1基、円墳19基の計23基が確認されている。酒巻14号墳からは、日本で唯一の旗を立てた馬型埴輪が出土している。筒袖を着た人物埴輪、ふんどしをした力士の埴輪など、古代朝鮮半島の文化の伝播がうかがえる埴輪がまとまって出土し、一括して国指定重要文化財に指定されている。

- 5) 地域の人材、文化財等を地域の力として捉え、学校経営に生かす取組は、以前から為されており、平成30・31年度に埼玉県教育局文化資源課が実施していた「博物館・美術館を活用した子供パワーアップ事業」はその1つである。文化・文化財を学校の年間カリキュラムに位置付ける試みは、同事業の川越市立川越小学校の実践に見られる。この試みを引継ぎ、南河原小学校では文化カリキュラムを作成し、活用している。詳細は、参考文献にある『文化創造としての和文化教育』pp.159-168に掲載している。

6) 南河原小文化カリキュラム

地域と共に歩む学校 博物館・美術館と協働する 南河原小文化カリキュラム														
	1 学期				2 学期				3 学期					
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
国語			芸術鑑賞「日本の言語文化」				南河原・北河原地域の宝物							
生活		(1年) 朝顔の栽培		田十郎朝顔				馬見球儀		在家・馬見塚のささら		スリッパ産業		酒造の伝統 観福寺石塔婆
社会	(4年) 地域の文化財・遺産(文化財保護課)		(6年) 社会科見学・手型絵写真(市立歴史博物館)	(3年) 社会科見学・足袋づくり(市立土曜教室)	(4年) 社会科見学・荒川流域の文化・産業(県立川の博物館)	(6年) 茶の湯体験	(4年) 「先人の働き」・産物・フェルトワーク(市立土曜教室)	(4年) 町まわりの行事「吾の市」	(3年) 昔の道具(市立土曜教室)	(3年) スリッパ工場の見学				
理科		(4年) 身近な環境・産物・フェルトワーク(県立川の博物館)					(5年) 流れる水のほたるさ(県立川の博物館)			南河原小のキャラクター「パレルくん」				
図画工作				南河原公民館茶室		(6年) 修学旅行(県立歴史博物館)		芸術鑑賞授業(県立土曜教室)						
総合的な学習の時間	夏野菜づくり	わた花の種まき	青大豆の種まき	わた花の絵割え		(5年) 地域の自然(県立歴史博物館)		青大豆の収穫	わたの収穫	綿糸づくり体験(市立土曜教室)			(3年) ささら体験	
特別の教科 道徳														
その他			(4年) 郷土食ゼリーフライづくり	(1年) 夏祭り(学活)		8月 河原神社の夏祭り		すずかけ祭り	(1・2年) 昔遊び(学活)				南河原・北河原地域の宝物 『平家物語』一度之戀 生田森の戦い 武蔵野國の住人 ○河原高直 ○河原盛直	

南河原小学校で長年行われてきた文化学習を整理し、令和6年度に教育課程に位置付けた。縦軸に教科領域を配置し、横軸を時間軸とした。入れ替えがあった場合にはその都度更新し、教員が全体像を把握できるようにしている。

7) すずかけ環境学習

南河原小学校では、利根川の氾濫原に広がる湿地と農業生産を地域の魅力の一つとして捉え、特色あるカリキュラムとして環境学習を設定している。近隣の方から農地をお借りし、サツマイモ、夏野菜、綿、在来青大豆などを栽培している。栽培した作物は、加工し、郷土食であるゼリーフライや豆腐、綿布、ピザなどにして生活をより楽しいものとする「文化」の根本を学ぶ学習教材としている。また、広がる麦畑や星川、利根川の流れ、青く広がる大空などを故郷の原風景とし、全校徒歩遠足等の行事では、それらの美しさを特に取り上げている。今年度は、行田市全体の取組との関連を強化し、古代米の栽培(田んぼアートとの関連)、古代蓮の育成、花手水の作成も行った。

- 8) タブレットを活用した家庭学習の手引きである。児童が習熟や探求など、学習シーンに合わせて自主学習を進める助けとなるよう令和6年度に作成した。
- 9) 暗誦チャレンジは、月替わりの名文を覚え、校長室で暗誦に挑戦する取組である。
- 10) 南河原小学校では、伝統的に自主学習帳による家庭学習に取り組んでいる。1冊終わるごとに全校朝会で表彰を行っている。多い児童は、1年間で10冊以上学習する。優れた内容は全校に広げ、全体の学習の質を高めている。
- 11) 「すずかけの庭ガイドブック」は、令和7年度の環境緑化コンクールの説明資料として作成したものである。地域の学識経験者や造園業者の協力を得て、植栽の樹木マップを作成するとともに、学校の歴史や樹木の謂れなどについても掲載している。

12) ネイチャーゲーム「すずかけの秘宝」は、校庭の樹木について学習することができる謎解きゲームである。



① から③の 形 の葉っぱは
 なんの木の葉っぱでしょうか
 高さが一番大きい木の名前を石板にかきましょう

① ス○カ○
 ② ア○○リ
 ③ ○ク○

これは何の木でしょうか ●に入る文字をならべて石板にかきましょう

① ○ク●シヨ○
 ② ○ナ○ズ●
 ③ ●ン○ク
 ④ ザク●

- 13) ふるさと学習は、行田市全体で進めている郷土行田のよさを学ぶ地域学習である。本校が進めている南河原小文化カリキュラムやすずかけ環境学習は、ふるさと学習の一環であるといえる。
- 14) 環境教育アドバイザーは、行田市内の学校で環境学習の出前授業をボランティアで行っている。昨年度は、星川・忍川の生物調査の結果をもとにした授業を行った。
- 15) 行田市では、現在6つの地域で、鼈という楽器を用いる獅子舞が伝承されている。
- 16) 馬見塚の獅子舞では、小学校高学年の児童が花笠を被り、祭りに参加している。
- 17) 埼玉県県民生活部文化振興課が、「埼玉県の伝統芸能を企業等と行政が一体となって未来へ受け継ごう」という社会的気運を醸成すること」を目的として、令和4年度から実施している登録制度である。伝統芸能の保存・継承に協力する企業や団体を「埼玉伝統芸能サポーター」として登録し、官民共同で伝統芸能を守っていく取組である。本校は、令和6年度から、馬見塚のささら獅子舞のサポーターとして登録している。
<https://www.pref.saitama.lg.jp/wabunka/supporter/index.html>
- 18) 観福寺の石塔婆は、2基の大型板碑である。鎌倉時代中期の代表的な板碑として知られ、昭和3年に国の史跡に指定された。江戸時代後期の「新編武蔵風土記稿」には、当地出身の武蔵武士で、源平争乱の際に摂津国生田の森の合戦で討死した河原兄弟の供養碑であるとの伝承が載せられている。河原兄弟は、平家物語の「二度之懸」に登場している。
- 19) 在来青大豆は、行田市で古くから自家消費用の「あぜ豆」として栽培されてきた。味がよいことから平成19年頃に栽培が復活し、年々栽培面積が拡大している。本校では、地域の方の協力を得て、播種、収穫、加工、試食を行っている。枝豆、豆腐、ゼリーフライと3つの方法で食し、児童の記憶に残る味となっている。
- 20) 綿花の栽培は古くから北河原地区で行われていた記録があり、行田市北部では盛んに行われていた。
- 21) ゼリーフライは行田市の郷土食である。「おから」とジャガイモ、刻んだ野菜をまぜ、コロッケのようにまとめて素揚げにし、ソースにくぐらせて味付けする。行田の基幹産業であった足袋工場の従業員が、おやつとして食べていたといわれている。

- 22) 田中昌弥氏は、『子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティ』の訳者まえがきの中で、「学校を希望の物語を紡ぐ場に転換すべく努力している教師」を励ましたいとし、物語の紡ぎ直しによって子供たちの支えとなる物語をつくっていくことの必要性を指摘している。
- 23) 学びのデザインについては、参考文献4・6・7・10に詳細な内容の掲載がある。
- 24) 児童・保護者アンケートは、令和7年1月に実施したものである。有効回答率は、概ね100%である。各項目の評価は4段階であり、数値は平均値である。原則として、この平均値の年度比較によって成果を計測しているが、100%の達成を目指したい項目などについては、4・3の評価の割合を示している。(今年度も令和8年1月に実施予定)
- 25) 見守りボランティアとの連携を緊密にし、地域の意見に対して早急に対応することの積み重ねによって、評価が向上したものと考えられる。

参考文献

1. テリー・イーグルトン著 大橋洋一訳『文化とは何か』松柏社2006年8月1日
2. E・D・ハーシュ著 中村保男訳『教養が国をつくる。』TBSブリタニカ1989年2月10日
3. D.ジーン・克蘭ディニン著 田中昌弥訳『子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティ』明石書店2011年4月20日
4. 向井隆盛「博物館・美術館を活用した子供パワーアップ事業の推進」初等教育資料2020年9月号No.997
5. 「地域の色・自分の色」実行委員会+秋田喜代美編著『色から始まる探究学習』明石書店2019年6月20日
6. 埼玉県教育委員会文化資源課『博物館活用ガイドブック』2020年2月19日
7. 小松弥生著『文化遺産の保存と活用―仕組みと実際―』クバプロ2021年10月30日
8. 中村哲編集『伝統や文化に関する教育の充実』教育開発研究所2009年7月1日
9. 中村哲編著『文化を基軸とする社会系教育の構築』風間書房2017年3月31日
10. 中村哲編著『文化創造としての和文化教育』風間書房2024年11月30日